

1 開会

2 土屋市長あいさつ

今年度 第3回目の総合教育会議に御参加いただき、誠にありがとうございます。

まずはじめに、第6波による影響で深刻な状況下にあります新型コロナウイルス感染症の関係ですが、現在、3月6日まで「まん延防止等重点措置」の適用期間となっております。こうした状況の中、峯村教育長はじめ教育委員の皆様方、各学校関係者の皆様におかれましては、様々な点で心配事や相談事など御対応をいただき、また、日頃から子どもたちの教育の充実・発展のため大変な御尽力をいただいておりますこと、心より感謝申し上げます。

市が実施する感染予防対策につきましては、先月2月1日から65歳以上の希望される方を中心とした3回目の「ワクチン追加接種」が始まり、予約枠を増やすなど接種の加速を図っているところですが、3月中旬までを目途に、希望される対象の方への接種が完了する見込みとなっており、また、12歳未満の皆様への接種券の配布を、順次進めているところです。

各学校関係者の皆様におかれましては、日々、感染防止の対応や予防など御苦勞をいただいていることと思いますので、皆様と一緒にこの難局を乗り越えていかなければならないということ、改めて強く感じているところでございます。

さて、本日の会議につきましては、第1回からの継続で「不登校支援」をテーマとしております。これまで、校長経験者のお二人からの学校現場での対応や、就労を目指す若者たちに対する支援等の取組事例などをお聞きして、委員の皆様との意見交換を行ってまいりました。

その中で、学校現場での支援体制の強化が必要であること、また、民間との連携についての検討など、それぞれのお立場で様々な御意見をいただきましたことから、本日は前回に引き続き、若者サポートステーション・シナノで統括コーディネーターとして事業運営に御尽力されています藤井様に御出席をいただく中で、若者を就労に結び付ける際の課題や要望などに関する意見交換を予定しております。

さらに、藤井様からは市内フリースクールの実践事例として、「侍学園」で取り組まれている不登校支援の状況等について、小中学校の児童・生徒も受け入れている沖縄校の事例も交えながら御紹介をいただき、委員の皆様との意見交換ができればと思っております。

本日の会議では、不登校支援に対する教育委員会と市長部局でのより一層の情報共有を図りながら、皆様の知恵と汗を出していただき、次の世代へ、素晴らしい「まち」をつくるうえで大切な課題でありますので、限られた時間ではありますが御意見をいただき、有意義な場となるようお願いしたいと思います。

以上で、私からのあいさつとさせていただきます。

3 峯村教育長あいさつ

日頃から、土屋市長には、上田市の教育行政発展のため、多大なる御支援、御協力をいただいております。心から御礼を申し上げます。

市長からもありましたとおり、新型コロナウイルス・オミクロン株の感染拡大により、市内の小中学校では、学校行事の中止・縮小や学級閉鎖など、さまざまな影響を受けております。今回の

第6波の状況を踏まえ、県からもより危機感を持った対応を求められており、土屋市長をはじめ関係部局の職員とも連携を強化し、感染防止策の徹底を図っているところでございます。

さて、本日は、「不登校の児童・生徒への支援」について、土屋市長と意見交換・協議をする機会をいただきました。

前回に続き、若者サポートステーション・シナノの藤井さんから、就労支援に携わる立場からのお話をいただきます。実際に不登校支援に向き合う職員の話はもとより、このように幅広くお話をお聞きすることで、義務教育段階の不登校支援における課題解決に向けた糸口を見つけることができればと思っております。

また、他の自治体の取組に目をむけますと、不登校支援における多様な学びの機会の確保として、民間団体と連携を行う自治体もあります。これに関連し、本日は、フリースクールの取組についても説明をいただけるということですので、今後の取組の検討に向けて、理解を深めたいと考えております。

これまでも申し上げておりますが、不登校の要因は十人十色であり、様々な事情が絡み合う、難しい問題であります。こうした厳しい現状を受け、不登校支援について土屋市長に注目をいただき、このような議論の場を設けていただいたことは大変ありがたく思っています。

本日の情報共有や議論を通じて、上田市の小学校・中学校における、不登校支援が一步でも前進できればと思っております。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

4 会議事項

(1) 上田市の不登校支援について

① 中学校卒業後の支援等について

● 長田地域雇用推進課長

参考資料と前回会議資料により取組等について説明

- ・地域雇用推進課では、上田地域で働く人材の確保と育成や定着、市内企業の働き方改革や福利厚生など、労働環境の改善を図ることを主な目的としている。
- ・卒業学生を対象とした就職フェアの開催、UIJ ターン就職の推進、関係機関と連携した就労支援などを行っている。
- ・ニートや引きこもりに対する相談支援体制については、社会との接点を持ち、経済的自立につなげていくことが重要で、様々な支援機関の相互の連携が必要と感じている。
- ・支援機関同士のプラットフォーム設置の求めもあるため、支援体制の構築を目指している。
- ・上田市における若年者就労支援事業として①上田市就労サポートセンター、②地域若者サポートステーションとの連携事業、③地域若者等定住支援事業の3点に取り組んでいる。
- ・国の地方創生推進交付金を活用した「わかいこ はたらこ プロジェクト」では、座学と職場研修を1ヶ月ずつ経験し、研修生が自己分析する機会を設けることで、自分に対する見方を変えて主体的な参加を促すことによって、多数の正規雇用につながっている実績もある。
- ・このような支援は、公的機関のみでは限界があるため、民間団体の活動と連携する枠組みを構築し、支援に取り組んでいく必要があると考えている。

● 藤井統括コーディネーター

前回会議資料により取組等について説明

- ・若者サポートステーションは、県内4カ所に設置され、主に15歳から39歳、40代の方までを対象に、セミナー等を含めて就労するための準備やサポートなどの支援をしている。
- ・若者の非社会的傾向の増加が進んでいて、卒業後に進路が決まらずニートや引きこもりという状況になり、社会復帰するまでに長期の時間を要するケースが多いと感じている。
- ・中学校や高校など、所属が無くなってしまふとどのように動いて良いか分からなくなり、今まで会っていた友達にも会いつらくなるなど、引きこもりの状況が生み出されているように思う。
- ・基本的な生きる力が身に付くよう、相談できる仲間や環境ができて、そのアドバイスの中から自分にあったものを選んで動いていく力が重要になってくると考えている。
- ・継続して動いていくためには、遊びや余暇の時間の使い方も大切だと感じている。

●北沢教育委員

長田課長の認識をお聞きしたいが、資料に研修生の姿から見られる要因や課題のようなことが書かれていて、「働く」ということをどのように捉えているか。アルバイトも「働く」と捉えるのか、やはり正規・非正規に関わらず、毎日就労することの捉えなのか。

また、引きこもりやニートの子ども達が「働く」ようになることが目的なのか、社会や人と関わることが目的となるのか。

それから、小学校や中学校の時に、教育課程の中でどのような体験や経験、あるいは取組をしてほしいということがあれば、教えていただきたい。具体的に言えば、中学校では職場体験や実習等もやっているが、職業を理論的に学ぶ機会が不足し、自己体験のみの認識に囚われている、と書かれているため、こういうことも関わってくるように思っている。以上3点についての質問をお願いしたい。

●長田地域雇用推進課長

「働く」という捉えについて、紹介した事業は正規雇用を目指して行っているが、非正規雇用も含め、現状ではアルバイトであっても働いて報酬を得るといった経験ができ、その積み重ねにより、長く働きたいという思いになってもらえればと考えている。

次に「働く」と「社会との関わり」については、自分と同じような思いをしている人がいると、その人の成長を促すきっかけになるということを目にするので、誰かのために自分がある、自己有用感が持てるようになってもらえれば良いものと考えている。

最後の部分では、なかなか自分に自信がない方が多いので、自分と同じような仲間がいて、自分でも何か役割があるということを集団の中から感じる視点が大事だと考えている。また、職業を倫理的に学ぶことは、中学校の職場体験の前後などで指導してもらっているが、もっと体験できる事業所を開拓し、色々な職業があるということを理解してもらえよう、場の設定など協力できればと考えている。集団活動の中で仲間と触れ合い、自分の価値が認識できていくような取組によって、集団と関わることの大切さが分かるのだと思っている。

●北沢教育委員

今話を聞いて、やはり小中学校の時期に、子ども同士、大人や地域との関わりなど、他と関わる中で自己肯定感や成就感、自分の良さなどに気づく体験のようなものが不足していると感じた。

●綿谷教育委員

すごく難しい内容だと思うが、就労支援を求めてサポートステーションなどに行ける方は良く

て、そこまで行き着けない方も、家庭環境などの阻害要素を取り払えるよう、行政としても色々
と対応を取っていかねばいけないと思う。引きこもりの期間が長くなるほど社会復帰が難し
くなるというのは確かだと思うので、小中学校での不登校というものを何とか改善してあげられ
ることが非常に重要だと思っている。誰しも環境に左右され嫌になって引きこもりたくなるような
気持ちもあると思うが、周りが汲み取りながら支援できるよう目配りや気配りも必要で、一方で付
きっきりというのも良くない場合もあり、難しい面もあるものと思う。

今後、就労を支援する機関まで行き着けるような仕組みの構築をお願いしたい。また、小中
学校の不登校をいかにして復帰させるかということが第一段階として、非常に大事なところだ
と思うので、行政として教育委員会等でも対策をお願いしたいと思う。

●森田教育委員

藤井さんが発言された「卒業すると所属がなくなる」という話が印象的だった。学校に対する
違和感があったとしても、所属する所がなくなるというのは大きいと思う。小中学校の頃からの
ライフキャリア教育が大切だと考える中で、所属というのは「働く場」だけでなく、家庭内での役
割もあるように思う。学校のクラス内、地域内にも所属という考えがあって、実際は色々な役割
に位置付けられているということ子ども頃から体感して、認知しながら過ごせるようになるこ
とが重要だと考えている。子どもの頃から様々な役割があるということを体感できる環境が大事
だと考えるが、どうか。

●藤井統括コーディネーター

学校生活の中で、優れてなければいけないというところに囚われていることが多いように感じ
ている。最近の若い子に話を聞くと、その子が持っている特技とか、優しさや気遣いなど良いと
思うところを褒めてみても、本人たちは数値化できるものや、トップオブトップと比べてしまい、自
分のことを認められないような思考になってしまっていると思う。自分の人生の主人公として生
きられていないような状況になっていると思う。

●長田地域雇用推進課長

家庭や学校以外の場で、本人が好きで興味のある事に参加できる、所属できる場が必要だ
と思う。我々の幼少期には、先生からの一言で興味を持って導いてもらったような経験もあった。
学校には仮に行かなくても、そのような場に行って参加できるという経験が必要だと思うので、
所属できる場の確保に努めたいと考えている。

●森田教育委員

その都度での達成感を積み重ね体感することが重要だと思った。教育委員会としても、重要
な課題として取り組んでいきたいと思う。

●大久保教育委員

中学校卒業後の所属がなくなったタイミングというのが大切であり、その後どのように動くかで、
その人の人生が大きく変わってくることもあるので、そのサポートが大事だと感じた。研修生の
姿の説明でもあったように、本来、学校現場で身に付けるべきことができている状況の中で、
研修の1ヶ月という期間で社会に出なければいけないため、可哀想な感じもしながらお聞きし
ていた。学校や行政、民間での取組として、不登校などにより身に付けることができなかつた自
己肯定感のようなものを、改めて体験できるような場があれば良いように思った。

人と関わらずに中学校を卒業してしまった子ども達が、何らかの支援を受けながら社会と関

われるよう、働きかけていく必要があるものと感じた。

● 峯村教育長

不登校や引きこもりは十人十色、心の扉をどう開けるかが非常に難しいことだが、寄り添って話を聞くことが大事だと考えている。この後の説明の中で、侍学園の沖縄校ではどうやって子ども達と接していくのか、どんなことに配慮して心の扉を開けさせていくのかなど、ご紹介をいただければありがたい。

● 土屋市長

各部署で引きこもりなど対応してもらっているが、プラットフォーム体制づくりが必要と感じた。庁内外での対応の体制づくりに取り組まなければいけないものと思っている。

児童生徒が長期の不登校になるきっかけがあると思うが、誰か気づいて、何かフォローなどできないかと感じている。家庭訪問などもしてもらっていて先生方も大変だと思うが、さらに寄り添えるような体制ができればと思っている。今現在、不登校になっている子への支援、これから不登校にならないようにする支援も大切だと感じている。

② 中学校卒業後の支援等について

● 藤井統括コーディネーター

資料1により「侍学園」の取組等について説明

- ・上田市の塩田地域にあり、フリースクールやオルタナティブスクール、「もう一つの学校」という意味合いで運営している。子ども達の基本的な力を身に付けるため、教えるだけでなく、スタッフと共に成長できる教育を目指している。
- ・基本的な生きる力を経済的・精神的な自立、自己決定や自己選択ができるようになることと考え、学校スタイルでの支援と寮生活の支援を実践している。
- ・生きる力が身に付くよう、体育や絵画などの時間も含め、一人ではできないことも仲間と一緒にならできるといった経験をしてもらっている。
- ・衣食住の基本を身に付けるために寮生活が大切で、夕食後には1日を振り返る時間を作って話し合うなど、規則正しい生活習慣、基盤づくりが大切だと考えている。
- ・命をつなぐため、愛情を持って対応するよう心掛けている。
- ・沖縄校は0歳から39歳までを対象として、母子家庭が多く貧困率も高い状況にある中、子どもや若者80人ほどが必要ある時に通っている。
- ・沖縄県の居場所運営事業を受託し、子どもの居場所づくりの取組の支援も行っている。
- ・親と離れる時間も大事で、普段と違う場所へ行くことによって、自分の家庭の文化が分かり、ほかとの違いなどに気づくことができるため、そういう時間の確保も必要だと思っている。
- ・スタッフ達の中には、子ども達が気兼ねなく話せる誰かでありたいという考え方が根づいていると思う。

● 北沢教育委員

沖縄校の紹介資料の中で「個別から集団への移行に着眼した支援」と記載がある。支援が必要な子どもには「個別の指導を」と言われているが、話をお聞きして、集団の中での体験が大事で、1対1の指導の充実さえしていけば良いというわけではないことを改めて考えさせられた。学校生活の中での遠足とか体育祭や文化祭など、総合的な学習も含めて、数値で評価されな

い部分の教育活動などをもっと大事にするべきである。そこで自己肯定感を感じたり、友人の優しさや気遣いとかが見えたりするのだと思う。義務教育の段階で、そういった行事などをないがしろにせず、個を大事にした集団づくりをしていかなければいけないということを改めて感じた。

●土屋市長

侍学園での多くの支援、取組をありがたく思っている。沖縄校での事例でも、子ども達が様々な行事の体験を通じて、自己成長が図られているように思う。

こうしたサポートが民間の取組として行われている現状、学校以外にもフォローしてもらえる場所があって、行政と民間がお互いに協力して支援できることを大変ありがたく思っている。

●綿谷教育委員

引きこもりや不登校の支援として良い活動だと思う。このような場には、ある程度心を開ければ行かれると思うが、その前の段階が大事で、周囲が温かく見守って支援しながら、そういう方向に持っていくことが大切だと思う。侍学園のように、人との触れ合いがあり、マンツーマン指導もできて、今までのしがらみもなく過ごせるような場所は、自分の気持ちの中で安心安全な居場所になって非常に良いことだと思う。上田市としても、そういった視点をもって不登校支援を考えてほしい。

●森田教育委員

沖縄校の取組は貧困にフォーカスしたものだが、上田市においても必要となってきた。基本的な生活の習得と、その家庭への支援など素晴らしい取組だと感じた。上田市でも、行政として取り組んでほしい。

●大久保教育委員

侍学園の上田校は市内の子が多いか、それとも県外や全国から集まって来ているのか。

●藤井統括コーディネーター

上田市内や県内が多い状況で、全国からも沖縄の宮古島、北は福島などからも来ている。

●大久保教育委員

今回、侍学園の教育内容などを説明いただき、人が育つために何が必要か、その教育方針なども明確にされていて、スタッフの皆さんも愛情を持って子ども達に接することで心を開き、本当に素晴らしい取組だと思った。そういったことを上田の義務教育の中にいかに取り入れていくかということが大切だと思うが、子ども達に寄り添って接することができるよう、時間と人の充実を図るなど、十分な支援ができるような取組が必要だと思う。

●小相澤政策企画部長

今後の取組について、市長と教育長のほうから発言をお願いしたい。

●土屋市長

3回にわたって教育委員の皆さんと意見交換を行ってきた。現場で取り組まれている先生方、藤井さんからの御意見なども聞く中で、行政としても長期欠席や不登校の問題に対してサポートが大切だと考えており、令和4年度の予算措置についても、人員体制や予算の充実を図るべ

きものと思っている。

不登校支援については、長期欠席になるきっかけへの対応など、子ども達に寄り添っていただき、現場の先生方も大変だと思うが、家庭に入り込むなど保護者とも話をすることも大事だと思っている。この3回の会議だけで答えは出ないが、一つのきっかけになったものと思うので、行政としてしっかり取り組まなければいけないと改めて強く感じている。

●峯村教育長

藤井さんには、侍学園に行けるようになるまでの子ども達への支援の方法など、また機会があれば教えていただきたい。これまで、不登校支援については教育委員会としても大きな課題として取り組み、その対応に苦勞してきている。今回、市長に注目してもらったことで、情報共有や良い議論ができたことを感謝している。また、予算措置への言及もありがたく思っている。家庭訪問を実施し、保護者と行き会うことなどを通じて、一人でも多くの大人が子ども達と関わることが大切であり、これからの支援体制の充実に向けて活かしていきたいと思っている。

本年度内には、県の教育委員会で不登校支援に関するガイドラインが公表となるので、これを参考として、慎重に対応していきたいと考えている。

●小相澤政策企画部長

ありがとうございました。さまざまな御意見を頂戴した。教育長からもあったように、民間の皆さんと連携し、力を合わせて学習活動を考えていく必要があるものと思っている。

5 その他

●峯村教育長

不登校支援については来年度以降も大事な柱として、引き続き市長部局とも連携しながら、同じテーマで検討していきたい。

●小相澤政策企画部長

次回会議については、新年度に入ってから開催として設定させていただき、協議の内容等、御提案をさせていただきたい。

詳細日程については、のちほど担当のほうから御連絡させていただきたいと考えている。

これにて第3回上田市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。